

UPDATED 05.06.2006

INTERVIEW

日時：2006年3月

via SKYPE voice chatting + e-mail

インタビュー：榎田 郁弥



フランソワ・キャリリール Francois Carrier : 1961年6月5日カナダ・ケベック州 Chicoutimi市の生まれ。1990年トリオを結成、オリジナル楽曲による1stアルバム「Poursuite」を制作。1997年2ndアルバム「Intuition」を制作。アルバム、オブ・ジ・イヤーにノミネートされる。1998年ヨーロッパ・ツアーでモントルー・ジャズ・フェスに出演。同年、NoEMI (ヌーベル・アンサンブル・ドゥ・ムジーク・インプロヴィゼーション) を組織。チューイ・レッドマンらと共演。3rdアルバム「Compassion」(Naxos Jazz)制作。Juno Awardでベスト・コンテンポラリー・ジャズ賞受賞。2001年ユリ・ケインをゲストに4thアルバム「All' Alba」(Justin' Time)制作。奨学金を得て6ヶ月間ローマに留学。作曲に励む。2004年、ポール・ブレイ、ゲイリー・ピーコックを得て「Travelling Time」(Justin' Time)制作。最新作はマット・マネリ (vib) をゲストに迎えた2枚組ライブ盤「Happening」(Leo Records)。

Vol.39

FRANCOIS CARRIER / フランソワ・キャリリール
(soprano/alto-sax)

♪ ケベック州の音楽シーン

Q: 生地のシコウティミヨウ市はどんなところですか。

フランソワ: モントリオール市北方500キロくらいの小さな町です。“Chicoutimi” というのは古いネイティブの言葉で「大河の果て」を意味します。近くを流れるSaguenay Riverは深さが3キロあるといわれています。

Q: どんな家庭でしたか。

フランソワ: 男ばかりの5人兄弟で、僕は上から3番目。音楽家になったのは僕だけです。

Q: 音楽に興味を持ったきっかけは。

フランソワ: 子供の頃から音にはとても敏感でした。自然に囲まれた静かな環境でしたから。ローティーン頃に冒険をしたくなり、カナダ横断の旅に出ました。各地でいろんな音楽やミュージシャン、教師に出会い、音楽を身に付けていきました。

Q: ケベック州のミュージック・シーンについて教えてください。

フランソワ: モントリオール市やケベック市には優れたミュージシャンがたくさんいます。マギル大学やコンコーディア大学から多くのジャズ・ミュージシャンが輩出されてきますからね。インプロのシーンもとても興味深いですよ。どこでも同じでしょうが、ジャズの演奏だけで生計を立てるのはとても難しいので、教壇に立ったり、映画やダンス、場合によってはジングルやCMの音楽を書いてしのいでいるミュージシャンがほとんどです。僕の場合は、コンサート以外の仕事をして稼ぐ時間がないので本当に大変です。僕が興味のあるのは音楽と心の平安だけです。フー!

ケベックには多くの優れたミュージシャンがいるといいましたが、正直なところ本当に傑出したミュージシャンはそう多くはありません。そういう人たちの多くはニューヨークへ出て行ってしまいますからね。たとえば、モントリオール生まれのポール・ブレイの場合は18才の時に故郷を出て行きました。

Q: コンサートやクラブの状況はどうですか。

フランソワ: 僕が住んでいるモントリオール市にはジャズやインプロを演奏する場所が70以上ありますが、常時ジャズを演奏しているクラブは「アップステアズ」と「ハウス・オブ・ジャズ」の2ヶ所だけです。ただし、2ヶ所ともスタンダードやメインストリーム中心です。

ケベック市のジャズ・クラブも2ヶ所です。

僕はしばらく前にクラブでの演奏から足を洗い、コンサート・ホールで音楽ファンのために演奏することに専念しようと思いを固めました。



NEXT >>>

[INTERVIEW Back Number]

[INAOKA's INDEX]

UPDATED 05.06.2006

INTERVIEW

Vol.39

FRANCOIS CARRIER / フランソワ・キャリリール
(soprano/alto-sax)

日時：2006年3月

via SKYPE voice chatting+e-mail

インタビュー：稲岡彰彦

♪ ポール・ブレイをゲストに招く

Q：故郷の先輩のポール・ブレイともCDで共演していましたね。

フランソワ：ポール・ブレイとの共演は琴線に響くもので、同時に楽しい経験でもありました。そもそもの予定は、トランペットのエンリコ・ラヴァとベースのゲイリー・ピーコックがゲストだったのですが、エンリコが突然体調を崩してしまっただけです。コンサートを中止しようと思ったのですが、突然ひらめいてポール・ブレイに電話を入れてみたら、その場で「OK!」の返事がもらえたのです。ポールとゲイリーが揃ったのでコンサートの翌日スタジオに入って録音したのがCD『Travelling Lights』というわけです。4人が初めて顔を揃えた時から心に通い合うものがあって、コンサートもレコーディングもとても楽しく幸せな気分満ちていました。

Q：『Travelling Lights』はすべてインプロでしたね。

フランソワ：現在まで15年間、生活のほとんどをインプロに傾注してきました。そこで得た結論というのは、完全に自由になるためには（恐怖からも自由になることを含めて）同じ志（こころざし）を持つ自由な精神の仲間と身を置く必要がある、ということでした。そして自由を愛するミュージシャンが集まってすべての束縛から完全に自由な音楽を演奏する企画を立てたのです。規則、条件、楽譜、音符、調性、コンセプトなどあらゆる縛りから完全に解放された音楽です。ポール・ブレイと最初に顔を合わせた時に彼が発した言葉に感動しました。「譜面は要らない。リハーサルも打合せも必要無いよ」。僕は思わず「ウォー！」と声を上げてしまいました。これが本当のインプロヴィゼーションだ！ウォー！ポール・ブレイやゲイリー・ピーコックという本当に偉大なミュージシャン、アーティストと即興演奏ができる、真に自由な精神の持ち主たちと音楽を共有できる、僕は心から幸福感に浸っていました。

Q：僕も似たような経験があります。1998年にポール・ブレイがソロ・コンサートで来日した時、ソニー・ミュージックと共同で富樫雅彦というパーカッショニストとのレコーディングを企画しました。ソニーの意向もあって富樫のオリジナルとポールがよく演奏するカーラ・ブレイやアネット・ピーコックの楽曲でレパートリーを組み、富樫のオリジナルは数曲、譜面を予めポールに送付しておきました。ところが、ホールに着くやポールは「今日はすべてインプロヴィゼーションで行く」と言い出したのです。ソニーの担当者は慌てましたが、さすがに富樫は「受けて立とうじゃないか」とまったく怯（ひる）みませんでした。彼も真のインプロヴァイザーです。ポールはECMのアルバムでも全編インプロで通したのがありますね。



『Travelling Lights』 (Justin' Time)

<<< BACK NEXT >>>

[INTERVIEW Back Number] [INAOKA's INDEX]

UPDATED 05.06.2006

INTERVIEW

日時：2006年3月

via SKYPE voice chatting+e-mail

インタビュー：稲垣 雄弥

Vol.39

FRANCOIS CARRIER / フランソワ・キャリール
(soprano/alto-sax)

♪ マット・マネリを招く



マット・マネリ (ヴィオラ)



ウヴェ・ノイマン (ギター)

Q: あなたの場合、ベースとドラムスを交えたトリオが基本フォーマットになっているのですか。

フランソワ: 15年前にトリオで始めました。ひとつのチャレンジでした。リズムとハーモニーの両面で期するところがあったのです。ビッグバンドやコンボでも演奏していましたから、自分のグループではもっと自由が欲しかったのです。もともと何においても縛りが嫌いという性格もあるのですが、時期的にも良いタイミングでした。つまり、私生活面でもいろいろ悪い習慣を断ち切ろうと努力し始めた時期だったのです。ドラッグやタバコです。アルコールは、アレルギーがあったので一度も口にすることはありませんでした。音楽面ではテクニックよりも感情の表現に心を砕くようになりました。食生活も改善しました。意識や直感力、精神や万物との接点をより高いレベルで実現するためにはこれらの改善が不可欠だと考えたのです。そしてその実現のためには私の場合、心の平安が必要だったのです。

Q: そして、『Happening』のコンサートとアルバムに至るわけですね。

フランソワ: そうです。『Happening』のコンセプトは文字通り「直感」にあります。今までに演奏したことのないミュージシャン、異質なアート・フォームの演奏者の表現に触れてみたいという欲求が非常に強くありました。

Q: ヴィオラのマット・マネリをゲストに招いたのも直感ですか。

フランソワ: マット・マネリの音楽についてはほとんど知りませんでした。というより正直なところ一度も耳にしたことがなかったのです。彼の父親ジョー・マネリのサクスを、ECMの録音でしたが、ラジオで聴いたことがあっただけでした。とにかく僕が欲しかったのはふたつの異なる、ユニークなヴォイスでした。ニューヨークへ電話を入れ、ジョー・マネリを通じてマットを知ることになったのです。

Q: ジョーの反応はどうでしたか。

フランソワ: ジョーにはこう言いました。「ヘイ! ミスター・マネリ、あなたは僕が世界で2番目に好きなサクソ奏者ですよ」「そうかい。ところで1番好きなのは誰だい?」「もちろん、僕ですよ!」彼は大声で笑い出しました。というわけでマットにコンタクトが取れ、コンサートが実現したというわけです。

Q: シタールとヴィオラというふたつの未体験のヴォイスが揃ったわけですね。

フランソワ: そうです。リハーサルはしませんでした。午後に皆で集まって簡単なサウンド・チェックをしただけです。これもCDに収録してありますよ。

Q: コンサートはどうでしたか。

フランソワ: まさに「ハブニング」でした。5人の素晴らしいミュージシャンとビデオ・アーティストと3人のインプロ・ダンサーたち。ウォー! もちろんすべてインプロヴィゼーション。規則は無し。メロディも無い。ハーモニーも無い。打合せや事前に決められたアイデアも無い。本当にまったく縛りが無い演奏なんです。本当に真の即自性だけ。本当の「ハブニング」から生まれた美の極致とでもいったら良いのか。2時間の心の接点だけ。思考や信念はまるで無かった。そして、翌日、マットはニューヨークへ引き上げて行きました。

Q: シタールのウヴェについては。

フランソワ: まったく同じことです。意図ではなく直感です。新鮮なヴォイスが欲しかったのです。

註: マット・マネリ 1969年ボストン生まれ。父親はサクソ奏者でニュー・イングランド音楽院教授。幼少の頃、ピアノを与えられたが平均率に不自由さを感じ、ヴァイオリンに転向。15才の時にマイクローナルを演奏する父親のバンドに入る。後に、ジュリアード弦楽四重奏団の1stヴァイオリン奏者に付いて学ぶ。父親とのデュオ・アルバムがECMにある(『Blessed』ECM1997)。

UPDATED 05.06.2006

INTERVIEW

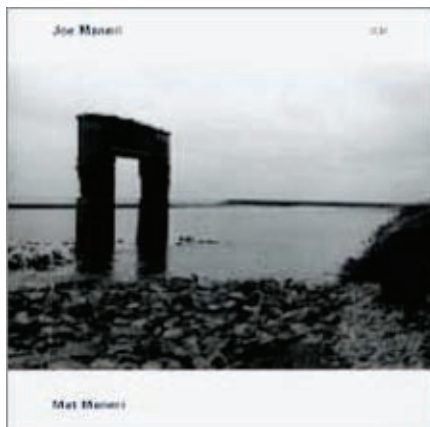
Vol.39

FRANCOIS CARRIER / フランソワ・キャリール
(soprano/alto-sax)

日時：2006年3月

via SKYPE voice chatting + e-mail

インタビュー：福園邦彦

ジョー・マネリ+マット・マネリ
『BLESSED』(ECM1997)

♪ マイクロトーンナル？

Q：ジョーとマットのマネリ親子はマイクロトーンナル（微分音）の演奏で知られていますが、マイクロトーンナルにはもともと興味があったのですか。

フランソワ：伝統楽器の音色や響きにはこだわってはいません。何れにしても音色と響きは無限ですから。どのような楽器であろうと、僕はその楽器の持つ音色と響きの持つ無限の可能性に魅せられてきました。要は、インスピレーションの問題です。宇宙はヴァイブレーションとインスピレーションで満たされているのです。必要なことは此処にいま存在しているという事実です。自我から脱却できれば望む音色や響きは自由に出すことができるのです。悲観論者のなかには、すべては言い尽くされてしまったという者もいるでしょう。ただ実際は僕らは何も知らないのです。ですから、発言し、演奏し、発見する努力を止めてはいけません。僕にとってマイクロトーンナリティというのは人間の心のもうひとつの観念なのです。もっとも大切なことは、感じたことをインスピレーションと魂を持って、音楽を通して宇宙のすべての生きとし生けるものに伝えることなのです。

Q：マイクロトーンナル・ミュージックとエスニック・ミュージックの関係についてはどう考えますか。

フランソワ：正直なところ、今まで術語としての「マイクロトーンナル」に考えを巡らしたことはありません。僕は自分の直感を信じているので、僕の行く先を導いてくれる譜面は必要ないのです。もちろん、マイクロトーンナル・ミュージックに基づいた音楽を多くの時間と労力をかけて作曲する人もいます。今まで多くの作曲家がそういう仕事をしてきました。“ビッグ・バン”以来、つまり宇宙の創造以来音楽はつねに宇宙に存在していました。すべての人類が試みたことは音楽を通して自己を表現する方法の探究でした。そして人類は作曲の方法を発見し、第三者が他人の作曲した音楽を正確に何度も繰返し演奏できるように紙に記譜する方法を発見したのです。たとえば、クラシックや現代音楽のように。宇宙もまたマイクロトーンナル・ミュージックで満ちています。自然や都市の至るところで耳にすることができます。われわれの耳に入るすべての音楽を記譜しようとすると地球上に存在するすべての紙を使っても間に合わないでしょう。そしてわれわれが聴き取ることができない音楽、たとえば、ウルトラトーンナル、インフラトーンナル、スーパートーンナル、人間以外の種が聴くことのできる音楽については人間は語ることもすらないのです。風、雨、そして鳥の声のアンサンブルに耳を澄ますなら、自然が奏でるマイクロトーンナルな音符は無数にあることに気付くでしょう。それこそ僕が関心のあるアプローチです。自然が奏でる音楽を愛と真心と精神を伴って演奏すること。これこそ真の意味のマイクロトーンナル・ミュージックでしょう。これこそ真の音楽であるはずですが。

繰返しになりますが、僕が本当に関心があるのは私の感じたことを音楽という共通の言語を通してできるだけ多くの自由な精神の持ち主と共有することにあります。音楽の由来は関係ありません。恐れを知らないミュージシャンであれば国籍や民族は問わないのです。たとえば、独創的で真の尺八の大家からは学び、共有するものがたくさんあるはずですが。

すべてを超えてもっとも重要なことは独創的で真正であることです。ミュージシャンとして、アーティストとして、そして何よりも人間として本物であることです。

Q：マイクロトーンナルを楽しみたいファンには『Happening』ではどのトラックを奨めますか。

フランソワ：Disc 1のトラック1, 2、Disc 2のトラック2かな。注意して聴けばCDの至るところで聴こえると思いますが。

註：マイクロトナーリティとは、標準的なダイアトニック・スケール（全音階的音階）に、意図的に微分調律（通常の平均率ピアノの各キーの間に存在する音＝三分音、四分音、六分音など半音より狭い音程）を加えた音楽をいう。

註：マット・マネリによれば、ビリー・ホリデイの歌やジョニー・ホッジス（デューク・エリントン楽団）のアルト演奏には、ブルースやフォークに由来するベンディング・ノートとして微分音が使われていた。オーネット・コールマンのアルトのピッチはつねに1/12音高いが、これも一種の微分音と考えられている。ただし、もちろんどの奏者も微分音として理解していたわけではない。ジョー・マネリはレスター・ヤング(ts)の演奏にヒントを得たと語っているが、マットと同様、ベルクやシェーンベルクもよく聴いていたとマットが証言している。マットによれば、微分音とリズムには相関関係があるという。通常の4ビート・ジャズでも四分音や八分音は使われているが、マイクロトナルを中心とした演奏には記譜が困難な独自のリズムが要求される。

<<< BACK NEXT >>>

[INTERVIEW Back Number] [INAOKA's INDEX]

UPDATED 05.06.2006

INTERVIEW

日時：2006年3月

via SKYPE voice chatting + e-mail

インタビュー：稲岡邦彦



フランソワ・キャリール
(ソプラノ+アルト・サクソ)



ミシェル・ロベール (ドラムス)



『HAPPENING』 (Leo Records)

Vol.39

FRANCOIS CARRIER / フランソワ・キャリール (soprano/alto-sax)

♪ 『Happening』はまさに「ハプニング」

Q：『Happening』で演奏された内容を聴き返してどう思いますか。

フランソワ：コンサートの前に皆から「何を演奏するのですか」と聞かれました。僕の答えはとても簡単でした。「分かりません」。そして演奏しました。キュー（合図）を出す者はありませんでした。皆がおたがいに接点を持っていたからです。

1曲目が始まり、そして終わりました。2曲目が始まり、そして終わりました。短いブレイクがありました。ダンサーから質問が出ました。「どの楽器でスタートするの」。僕は答えました。「分かりません。ここだと感じた時に入ってきて下さい」。4曲目が始まり、30分後に終了しました。

もっとも挑戦的なことは、目的地が分からない時でもそこに続けることです。着地点は何ら重要ではなくなります。方向性をもっとも大事なことです。そしてこの方向性は魂、心、直感から出てくるのです。マットと僕がデュエットを即興で演奏しながら、＜ハプニング（アンコール）＞、コンサートが終演を迎えましたが、これもまったく予期しないことでした。

Q：同じサクソ奏者としてジョー・マネリをどう思いますか。

フランソワ：私にとって『Happening』は本当に深い経験となりました。あのコンサート以来、マットとジョー・マネリについてより多くのことを知ったと思います。ジョー・マネリの音楽により耳を傾けることになった今、彼こそ創造的なミュージシャン・アーティストであると断言することができます。彼はインスピレーションに溢れています。彼はインスピレーションを探し求めたのではないのです。そこに見出したのです。

インスピレーションを見出す唯一の方法は心と接点を持つことです。ジョーの音楽に耳を傾けることはジョーの心そのものに耳を傾けることを意味します。

<<< BACK NEXT >>>

[INTERVIEW Back Number] [INAOKA's INDEX]

UPDATED 05.06.2006

INTERVIEW

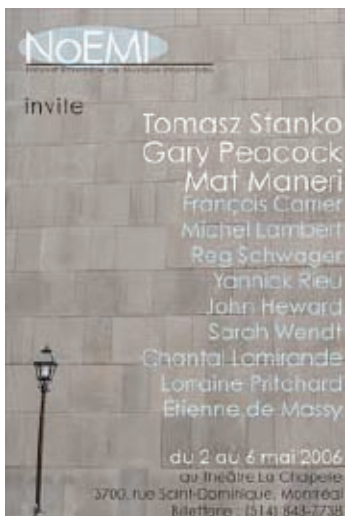


インタヴュー:

KENNY INAOKA / 稲岡 邦弥

インタヴュープロフィール:

1943年、兵庫県生まれ。早大政経学部卒。
トリオ・ケンウッドのECMマネージャーを経て、
音楽プロデューサー。
共著「ジャズCDの名盤」(立春新書)。
著書「ECMの真実」(河出書房新社)。



Vol.39

FRANCOIS CARRIER / フランソワ・キャリリール
(soprano/alto-sax)

♪ 5月にシリーズ・コンサートを予定している

Q: 次の企画は具体化していますか。

フランソワ: 直近の企画としては今年の5月にモントリオールで行うコンサートがあります。このコンサートにはミュージシャン、アーティスト、ダンサー、ビデオ・アーティスト、ペインターが参加します。5夜連続のコンサートで、マット・マネリ、ゲイリー・ピーコック、トランペットのトマス・スタンコらが参加する予定です。すべてのコンサートを録音、録画し、公表することになっています。その後、ヨーロッパにも出掛けますが、できれば日本にも行ってみたいですね。

Q: それだけのコンサートを実施するには自治体などからの助成金も必要になると思うのですが、カナダではどのようなシステムになっていますか。

フランソワ: カナダでは複数の助成金への申請が可能です。しかし、サポートはG8(注: 主要8ヶ国グループ=日・米・英・仏・独・伊・加・露)の中では最低だと思えます。必要に応じて国、州、市にそれぞれ申請することができます。加えて私設の基金もあります。

Q: 具体的に説明してもらえますか。

フランソワ: たとえば、5月に開催するシリーズについて説明しますと;

- A: カナダ芸術協会=大量の書類と5ヶ月の待機=助成金が下りました!
- B: ケベック州芸術協会=大量の書類と6ヶ月の待機=助成金が下りました!
- C: モントリオール市芸術協会=大量の書類と6ヶ月の待機=却下されました。

助成金の種類にもよりますが毎年連続して申請することも可能です。

A: 作曲や国外からマスター・クラスの演奏者を招聘する場合=国と市に同時申請可能

B: NoEMIのような非営利組織のプロジェクトの場合=国と市に同時申請可能。ただし、同一プロジェクトの連続申請は不可。

審査は3,4人の審査員が行い、審査員は半年交代です。審査員の個人的な感情にも左右されることが多く、審査員が完全に客観的に審査することはほとんど不可能と思われる。自分の経験では一件も助成金が下りない年があったり、逆に3,4件の助成金が同時に下りた年もありました。ドイツでは国家予算の4%がアートに投下されますが、カナダではわずか1%に過ぎません。

とくに僕のようなインプロ系ジャズ・ミュージシャンの場合、助成金が下りる確率がとても低いですね。

僕が日本に行くことになった場合は、3ヶ月の猶予があれば渡航費とおそらく宿泊費の助成は確保できると思います。

Q: 新譜の予定はありますか。

フランソワ: 9月にテナーのデュイ・レッドマンをゲストに迎えたアルバムを発売します。『Open Spaces』というタイトルで、1999年のケベック・ジャズ・サマー・フェスティバルでのライブ録音です。

Q: 最後に夢を聞かせて下さい。

フランソワ: 最大の夢は、たったひとつの音を演奏し、その一音で地球上のすべての生きとし生けるものの心に触れることです。JT

<<< BACK

[INTERVIEW Back Number] [INAOKA'S INDEX]